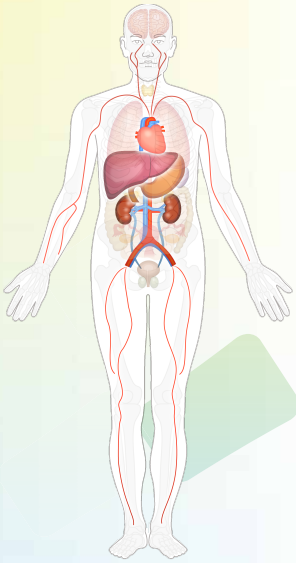
小児疾患



	検査項目 ※検査項目をクリックいただくと詳しい情報を閲覧できます。	目　的 対　象	小児疾患	
	生化学Ⅰ総項目数	主な臨床的意義	10	5
	実施料		109	93
	判断料		144	144
	●合算		253	237
1	γ-GT	胆道閉塞・アルコール肝炎・脂肪肝		
2	**AMY**	**膵臓・唾液腺・腎臓**	●	
3	**ALP**	**胆道・骨**	●	
4	**AST**	**肝臓・心臓**	●	
5	**ALT**	**肝臓**	●	●
6	CK	心筋・骨格筋・甲状腺		
7	**LD**	**心臓・肺・骨格筋・溶血**	●	●
8	コリンエステラーゼ	肝硬変・脂肪肝・農薬中毒・麻酔・栄養		
9	**総ビリルビン**	**肝炎・胆道閉塞・溶血**	○	
10	**直接ビリルビン**	**肝炎・胆道閉塞**	○	
11	**クレアチニン**	**腎臓・筋肉量**	●	●
12	**尿素窒素**	**腎臓・組織蛋白異化**	●	●
13	**総蛋白**	**栄養**	●	●
14	**アルブミン**	**栄養・炎症**	●	
	A/G 比（計算項目）	**一般状態**	◯	
15	尿酸	痛風・腎臓・肥満		
16	**ブドウ糖**	**糖尿病**	●	
17	中性脂肪	動脈硬化		
18	総コレステロール	動脈硬化		
19	LDL コレステロール	悪玉コレステロール・動脈硬化		
20	HDL コレステロール	善玉コレステロール・動脈硬化		
21	HbA1c	糖尿病		
22	**CRP**	**炎症**	●	●

・HbA1c は血液形態･機能的検査項目で、実施料は 49 点、判断料は 125 点、CRP は、免疫学的検査で、実施料は 16 点、判断料は 144 点。
＊CRP の適応疾患については、診療報酬支払基金の判断に違いがあるので注意が必要
◯は、計算項目で保険上算定できない。
○は、10 項目を超えることを容認するなら加える。
●は、生化学以外の検査項目

◆小児疾患

・想定する疾病によって、選択項目候補は異なるが、最も一般的なスクリーニングを考える。
・小児救急疾患の大半は、上気道感染、嘔吐下痢症、そして小児に特有の伝染性疾患（感染症）などである。経過が急なので、迅速検査が必要である。
・中でも、感染症が多い：多くはウイルス感染であり、CRP がわずかしか増加しない特徴がある。膀胱炎、肺炎、中耳炎などの細菌感染との鑑別に有用。アルブミンが消費され、グロブリンが増加するので、総蛋白、アルブミン、A/G 比が役立つ。
・ウイルス感染では、しばしば肝障害を伴うので、ALT と ALP を用いる。できれば、AST も欲しい。
・ALP は成長期には基準値を大きく逸脱して高値であることに留意する。
・耳下腺炎など、唾液腺疾患の診断に AMY が役立つ。
・下痢･嘔吐（感染以外に自家中毒、腸重積など）が多く、また発熱のみでも食事が入らず容易に脱水となる。尿素窒素とクレアチニン、総蛋白などが指標として大事である。
・新生児であれば、ビリルビンが必須である。

監修：関西医科大学 名誉教授　高橋伯夫